

意に可なり

良

寛

慾無ければ一切足り

求むる有れば万事窮す

淡菜 饑を療す可く

衲衣 聊か躬に纏う

独り往て麋鹿を伴とし

高歌して村童に和す

耳を洗う 巖下の水

意に可なり 嶺上の松

【作者】良 寛（一七五八〜一八三二年）・江戸時代末期の僧侶。本姓山本、幼名栄蔵（えいざう）、のち文孝（ふ

みたか）と改めた。字は曲（まがり）、出家して良寛また大愚（たいぐ）と号した。越後（新潟県）出雲崎の人。家は代々神職と名主（なぬし）を兼ね父泰雄は以南（いなん）と号して越後俳壇の雄であった。良寛はその長子。成長して備中（岡山県）玉島の 国仙和尚（こくせんおしょう）に学び、のち諸国を行脚（あんぎや）して帰国し国上山（くがみやま）の五合庵に入り、四十七歳から十三年間ここに住んだ。晩年麓の乙子（おとこ）神社の庵に移り天保二年一月貞心尼（ていしんに）に看取られ歿す。時に七十四歳。良寛は俳句、短歌に一家をなし書もまた当代第一と称せられた。

【語釈】\* 衲 衣：衲はころも。また僧の自称。僧の衣類を表す。

\* 麋 鹿：麋はおおしか。 おおしかと鹿と。

\* 洗 耳：堯帝（ぎょうてい）の時。 位を許由（きよゆう）に譲ろうとしたところ。 許由はけがらわしい事を聞いたと川の水で耳を洗った相伝の故事に基づく。

【通釈】欲がなければ、すべて足りて不足ということはない。 求めようとすることから、万事きわまるのである。

粗食でもうえをいやすことができ、粗末な衣でもどうにか寒さをしのぐことができる。

独り鹿をつれながら、自然にひたり、また村においては子供達と声をあげて歌いあう。

岩の下には清らかな水が流れていて、俗事のけがれを洗うことができる。 嶺上の松風は仏の声となって

私の意（こころ）を満たしてくれる。